

大正大学地域創生学科の地域実習報告

—今治市での取り組みの紹介を中心として※—

鈴木 恵理¹、関 清剛²、大澤 真浩²、米崎 克彦³

¹今治市 地域おこし協力隊

²大正大学 地域実習講師(今治市)

³大正大学 地域創生学部 地域創生学科 准教授

(要旨) 本稿は、大正大学地域創生学部地域創生学科で行われている「地域実習」について概要をまとめ、地方地域での実習の1つである今治市での取り組みを報告するものである。地域創生学科の実習は地域実習Ⅰから地域実習Ⅲまで、3年間にわたり行われる。とくに、地域実習Ⅱは、学生がはじめて地方地域に長期に滞在する実習の形式となっている。今回は、その中で、今治市で行っている実習について現地の視点から取り組みの工夫や課題などを含め報告をする。

キーワード：地域創生学科、地域実習、地域実習Ⅱ、今治市

1. はじめに

2016年にスタートした大正大学地域創生学部地域創生学科は、“地域創生”というテーマをもとに社会科学系の学問を中心とした学際的な学科となっている。そして、通常の教室での講義(「座学」)だけでなく、地域実習という実践の機会を1年生から3年生にかけて行い、理論と実践を繰り返すカリキュラムを特徴としている。

地域実習は、学生が地域での長期の滞在中、その地域を知りまた問題や課題を地域の方とともに考え、解決するためにどのようなことをすべきかを考えることを目的としている¹。創設当初の実習は、1年生と3年生が地方地域に滞在し、2年生のときは東京において1年次で滞在した実習地と東京を結ぶことを目的とした活動を行った。この取り組みは、3年間かけて多くの学生と地域を結ぶこととなり、UターンだけでなくIターンを

行ったものや定期的に実習地となる地域を訪ねるような関係人口となり、一定の成果を生み出した。しかし、2019年末から感染を拡大し始めた新型コロナウイルス感染症が、2020年以降世界的にパンデミックをおこし、従来の地域実習をおこなうことが不可能となった²。その後、世界的なパンデミックが落ち着き始めた2023年度より地域に長期滞在型の地域実習を再開することとなった。しかし、パンデミック時の学修や様々な状況を踏まえ、地域実習は新たな形として再スタートさせることとなった。

そこで、学科における学びの最終目標として卒業論文作成がある。そのため、本学科のカリキュラムの特徴である地域実習と卒業論文のつながりをより明確化して、4年間の学びを再定義している。

地域実習Ⅰ(1年生)では東京において、地域創生にかかわるプログラムに参加する。ここでの目

※ 今治市での地域実習は多くの関係者の支えがあり成立している。特に今治市役所の皆様には大変お世話になり感謝している。その中でも産業部産業政策局 i.i.imabari(アイアイ今治)推進課課長補佐(兼)地域経済循環係長の小林千紗季氏には、実習受け入れの検討の時期から現在まで多くのご助力をいただいている。

¹ 対象となる「地域」は、政府の地方創生政策とは違い、すべてのエリア(首都圏や海外)である。

² 新型コロナウイルス感染症が蔓延している時期の地域創生学科の学びに関しては、米崎(2022a)(2022b)を参照。

標は、地域創生とは何かということを理解することである。次に地域実習Ⅱ（2年生）ではグループを形成し、地域に滞在しながらそれぞれの地域の特徴とそれにかかわる課題を学ぶ。そして複数の地域で学ぶことによって、それらを比較する視点を生み、このことが自分の研究テーマを磨く目的となっている。そして、地域実習Ⅲ（3年生）では、各人の研究テーマにもとづく実習地で実習を行う。3年生の実習は、ゼミ教員とのやり取りの中でテーマを磨き、実習計画を作り上げていく。このことが4年生における卒業研究へつながっていく（図-1）。

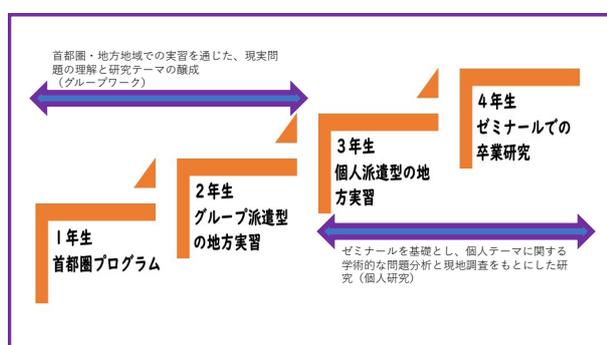


図-1 実習と卒業研究の関係性

本報告では、現在行われている地域実習の概要と地域実習Ⅱを実行している地域のうち今治市から現地の視点で地域実習について報告をまとめた。本稿の構成は次のようになる。2では、現在の地域実習について概要を述べる。3では、地域実習Ⅱをおこなっている地域のなかで、2023年からスタートした今治市の実習に関して経緯からプログラムの特徴や今後の課題まで報告をする。そして、4はまとめである。

2. 地域創生学科の地域実習の仕組み

地域創生学科のカリキュラムの最大の特徴は「地域実習」である。1年生から3年生までの3

年間、毎年第3クォーター（本学科では1年を4期に分けている。例年、第3クォーターは、9月下旬から11月中旬までである）におこなう。

地域実習Ⅰ（1年生）では、東京を舞台に地域創生学科の教員が用意したプログラムに参加する。2024年度は11のプログラムが行われた³。プログラムはそれぞれ20人前後の学生が参加し、2週間で行われる。学生は前半と後半の2つのプログラムに参加する。これらのプログラムの目的は、①都市部におけるフィールドワークを通して地域の魅力や課題を発見する調査・研究の手法を身につける。②プロジェクトに参加する経験からチーム活動の意義を理解し、実践スキルを習得する。③学内外のステークホルダーとの関わりから、地域創生に必要な多様な視点を理解する。であり、これらを通じて個人研究を実施するための基礎を実習経験から身につけることが目標となっている。

地域実習Ⅱ（2年生）ではグループを形成し、全国10地域（宮城県南三陸町、新潟県南魚沼市、静岡県藤枝市、島根県益田市、兵庫県淡路市、和歌山県御坊市、徳島県阿南市、愛媛県今治市、宮崎県延岡市、東京都）に滞在する。期間としては1年生同様2週間を1単位として、基本的には2か所に滞在する（一部の学生は、1か所で4週間滞在するパターンもある）。2年生の実習では、それぞれ1チーム10人前後となり現地講師を中心に、共有したコンセプトの下でそれぞれの地域の特徴を踏まえ現地の地域創生に関するプログラムを体験しながら学ぶこととなる。

実習Ⅱにおける目的は、地域実習Ⅲや卒業研究において、個人の関心テーマにもとづいた調査活動の計画や実施が求められることに備え、個人の関心テーマの醸成や、関連して必要となる学問的なアプローチを構想する力の育成である。また、地域の人々との交流や対話、現地での活動体験の他、地域で共に行動する学生や他地域において実

³ 2024年度の地域実習Ⅰのテーマは以下であり、様々なテーマが用意されている。①「めざせ！まちあるきの達人！」、②「街の空間で謎解きコンテンツツクールを作る」、③「キッチンカーやカフェで地域に貢献する方法を学ぶ」、④「探索！地域ブランド、製作！手書き地図」、⑤「“人びとが下北沢に引き寄せられる理由とは？—シモキタの魅力を探る2週間—

”」、⑥「商店街活性化プランの作成」、⑦「東京一極集中を考える」、⑧「学生プロデュース物産フェア・プロジェクト(第一勧業信用組合×学生)～大学生が考える特産品の魅力」、⑨「“水”から東京の環境問題を考える」、⑩「持続可能な資源循環型・脱炭素型まちづくり」、⑪「東京からUIJターナー者増加をめざす地域と協働する戦略的実践プロジェクト」。

習を行う学生との交流や対話を通じて、地域に対する理解を深め、個人の関心テーマを明確にすることである。このため、実習講師には、そのまちのキーマンとなる方（地域人）の生き方・働き方・暮らし方に焦点をあて、インタビュー等を通じて理解することや現場での体験学修を通じて、その地域を深く理解するために地域人探究・地域体験をプログラムに取り入れるように事前に依頼をおこなっている。さらに、学生の中には、早くから個人テーマを持っている学生もいるため、学生が個別で設定しているマイテーマや班・実習地として掲げるテーマの探究、まち歩きを通じた地域資源発見、街頭インタビューなど、自ら計画した活動を通じて地域を理解するための学生自主活動も行えるような配慮をお願いしている。

地域実習Ⅲ（3年生）では、各人の研究テーマにもとづく希望実習地を決定し、地域の受け入れ承諾と大学からの認可を得た上で実習に赴く。3年生の実習は、ゼミの教員と相談しながら、学生自身が研究テーマの設定をして、実習計画を立て、それを実行する。学生の数だけのプログラムが存在し、多くの学生は、4年次の卒業研究を見据えたうえでの活動となっている。

1年生および2年生において、地域創生に関する基本的な考え方や知識を増やし、実地調査において現場を知ることにより、知識が現場でどのようになっているのか理解する。また、現場において様々なアクター（行政、住民、企業、諸団体など）とかがわりあうことにより、様々な考え方や立場を知り問題を多面的に考えられるようにする。また、複数のプログラムを受けることによって、比較する視点を常に持つことを目的としている。3年生では、自分の問い・テーマを設定し、4年次での卒業研究を念頭に置いて研究活動を行う。

3. 愛媛県今治市における地域実習

(1) 経緯と概要

愛媛県今治市は、2022年6月に大正大学地域構想研究所が運営する「広域地域自治体連携コンソーシアム」に参加したことで、巢鴨地区商店街にあるアンテナショップ「ガモールマルシェ」での

地域フェア開催を実施する運びとなった。これを皮切りにして、今治市島しょ部地域の高校生と大正大学地域創生学部生とが一緒に、今治市大三島地域の音声観光ガイドアプリ「ロケトーン」を使ったコンテンツの開発など連携した取り組みを進めてきた。

2023年10月に初めて2年生の地域実習Ⅱの1グループを受入れ、2024年度には、地域実習Ⅱを前後半で2グループ、3年生の地域実習Ⅲで3名を受け入れた。なお、3名のうち2名は地域実習Ⅱで今治市を訪れ、引き続き当地を探究の場として選択している。

地域実習Ⅱのプログラムは、前半で特色ある地勢を活かした多様な取り組みを体験する回遊型プログラムを設定し、後半に学修を深める機会を設けた。「地域づくりは人づくり」をコンセプトに、地場産業に携わる人、この地に移住し新たな生活スタイルを作り上げていく人、それらを繋げて支えていく活動を続ける人など、それぞれの視点や思い・活動に直接触れることで、地域の現状や特徴、魅力や課題を探究し、学生たちが知見を深め、今後定める自身の研究の方針やライフキャリアを見出していくことを目的としている。

また、学修の最後には今治市長ら市幹部職員に対して、自分たちなりに捉えた地域の課題感と解決の方向性について考察を述べ、提言を行ってきた。

(2) 特徴的な取り組みの紹介

a) FC今治の取り組みと里山スタジアム見学

プロサッカーチームFC今治（2025年度よりJ2に昇格）を保有する株式会社今治・夢スポーツは、サッカーチームの経営に留まらず教育関連や地域貢献といった各種の事業展開で地域作りに大きな役割を果たしている。その取り組みや歴史を知ることができるといった意図で設定した。

「FC今治アシックス里山スタジアム」の見学では、地域の中で色々な人々と共生していこうとする企業理念や施設のコンセプトを具体的に学び、クラブとしての成長の歴史を理解することで、企業としての地域貢献の意味を考えさせることがで

きた。

b) インフラツーリズム(来島海峡大橋の塔頂体験)

「瀬戸内しまなみ海道」は、交通インフラだけでなく、観光コンテンツとしての役割も大きい。その建設は島しょ部地域を含む瀬戸内周辺地域の積年の願いであり、今治市の興隆衰退の歴史とも重なっているため、周辺住民の生活や今治市について考えるきっかけとなる教材であるとも言える。

本四高速株式会社しまなみ今治管理センターの協力(無償)により、活用状況や経済効果、建設にかかる高い技術力などを学んだ後、大橋主塔(184m)への登頂や桁下外面作業車の搭乗体験、橋桁内部の見学など、通常の体験コースでは見られない箇所への進入も許可していただいている。この厚意は大正大学卒業生が本四高速株式会社で活躍していることが理由になっており、生徒にとっては母校への誇りを感じる機会でもある。

c) 地域住民との意見交換会

その地で暮らしを営む生活者としての声を聞くことで事業者や観光者とは違う視点や解像度での知見を深めることを目的として、地域住民との意見交換の場を設けている。島しょ部住民と陸地部住民では生活スタイルや環境の違いが見られるため、両者の声を聞くべく2回に分けて実施した。

2024年度は、島しょ部地域のU I Jターン者3~4名それぞれと移住や観光といった学生のマイテーマに沿う議論が進んだ一方で、陸地部では1名のゲストによる講義的な場になってしまうという課題が残った。いずれにしてもこの地に根付こうとする生活者としての生の声を聞く場としては意義深い時間となっている。

(3) プログラムの構成について

表-1で示すように、今治市における地域実習Ⅱのプログラムは見学や体験が網羅されており参加学生は今治市を多面的に捉えることができる一方で、個々への知見が表面的なものとなっているのではないかという懸念がある。そのため、参加予定の学生から事前に意見(希望)を徴してプログラムに反映するという提案も上がった。様々な検討を重ね、次年度は、2年次の学生であるという前提のもと、次の研究段階への材料提供

という意味で、今治市を知らない学生たちに当地の色々な顔を見てもらうことにフォーカスすることとした。なお、このことについては、毎年効果検証しながらブラッシュアップを重ねていきたい。



図-2 里山スタジアム訪問
(2024年10月 関清剛撮影)



図-3 来島海峡大橋訪問①
(2024年10月 関清剛撮影)



図-4 来島海峡大橋訪問②
(2024年10月 関清剛撮影)

日時		活動内容
1日目	午前	移動
	午後	オリエンテーション、はじめに
2日目	午前	受入式 座学(産業、文化、移住、サイクリング)
	午後	地場産業(今治タオル)見学3h
3日目	午前	サイクリングツアー2h
	午後	地場産業(造船 海運)見学1h
4日目	午前	史跡巡り(村上海賊)2h
	午後	地域住民との交流会1.5h
5日目	午前	地場産業(菊間瓦)見学 体験 2h
	午後	陸地部地域住民との交流会1h 学びの言語化2h
6日目	午前	自主活動日
	午後	
7日目	午前	自主活動日
	午後	
8日目	午前	地場産業(桜井漆器)見学 1h
	午後	里山スタジアム見学 FC今治による地域活性化についての話2h
9日目	午前	インフラツーリズム(来島海峡大橋塔頂体験) (しまなみ来島海峡遊覧船) 2h
	午後	成果まとめ
10日目	午前	成果まとめ
	午後	成果まとめ(直前練習含む)
	夜	関係者交流会 ご当地グルメ体験
11日目	午前	成果まとめ(直前練習含む)
	午後	
12日目	午前	成果発表会
	午後	移動

表-1 2週間のプログラム

他の課題として、そもそもの実習地選択が学生たちの持つテーマと合致しているのだろうかという点も挙げられた。これに関しても、今治市のプログラムが網羅的であることの欠点の一つであるとも捉えられる。実習内容が幅広いため、マイテーマと合致することを期待して選択するのではないかと考えているが、学生たちの期待通りにはならない場合も想定される。この掛け違いを早期に洗い出し、期間中における学生たちの方向性をフォローしやすい環境をつくるのが肝要であるために、例えば関係者交流会を早めに設定すること、併せてプログラムの最後にマイテーマに沿った実習経験として得られたことを振り返る時間を設けるなど、改善していきたい。

また、地域住民との意見交換の場を入れたことで生の声を多様な視点から聞くことができ、地域創生にむけた解像度が上がったように見られた。

とはいえゲストの話を聞くことが主となる場面も多かったため、参加学生が主体性を持って意見交換に取り組める仕掛けを工夫したい。加えて、参加したゲストの特徴には若干の偏りがあったため、もう少し多様な声を聞ける工夫も凝らしていきたい。例えば、町おこしグループや地域産業を支える外国人労働者などとの新たな交流活動を取り入れることでも今治市の現状や課題に更に迫ることができるだろう。

あくまでも学生自らが研究の方針や自身のライフキャリアを見出していくという立場にたち、実習内容をより一層精査していくが、学生たちの関心・意欲を喚起させつつも、考え方や受け止め方に偏りが生じないように配慮しながら、様々な立場の市民生活者の声を拾わせていくことが大切になると考える。

(4)学習のアウトプットについて

本項が 2024 年度の今治市地域実習における一番の課題であろう。

その一つはまず、最終成果物の問題である。昨年度に続き今年度も後半の2日と半日を成果まとめの時間として確保し、成果発表を市への提案という形で行った。短期間の網羅的な学びであるので、結果として深まりのないものになることも多く、客観的にみると必ずしも満足のいくものではなかった。また目が引かれやすい観光分野への提案に集約されるパターンが多く見受けられた。加えて時間的な関係からグループごとに分かれての発表にならざるを得ないことにより、学生たち一人一人がマイテーマに沿った学習内容を満足のいくクオリティで出せてはいないという点がある。

更には、実習評価の際に個々の学生への評価が一部の講師の主観的な評価になってしまっているのではないかという危惧も残る。

しかし前者における課題は、3年次の学習への動機付けになるという見方もできるかもしれない。

数々の課題を一挙に解消することは難しいが、改善にむけた一つの試みとして成果発表の形式に市の行政課題を勘案したサブテーマを与えることが挙げられている。例えば「こどもの笑顔」や「もったいない」「多文化共生」などといった題材は、

少し幅広く感じられるもののマイテーマに沿った物事の捉え方ができるという自由度を併せ持つことができる。成果発表の方向性を予め定めておくことで、前半の回遊型プログラムをより実りある時間に昇華することができると考えられる。

もう一つは、日々の中で振り返りを行う時間を増やす案である。今年とは昨年度と比較して、オリエンテーション時に各自のマイテーマ共有を行った。また、中間時点で振り返りの時間を、特に後半の実習では、SWOT分析を取り入れて今治市の現状や課題を分析させた。こうした時間は学生自身がマイテーマと改めて向き合い、今治市を俯瞰的に捉えることができる有効な時間であったと考えられる。来年度は、現行プログラムの各内容における意義や目的を改めて精査し、振り返りの時間を日々の活動の最後に実施したり、数日に一回の意見交換の場を設けたりするなど、積極的な学びのフィードバックの時間や場を充実していきたいと考える。

(5) その他について

今回は3年生の受け入れも行ったが、この地域実習Ⅲのあり方については再考を要する。学生の力量によってしまえばそれまでではあるが、どう行動したら良いか分からない時間が多いように見受けられた。特に、2年次に今治実習を経験していない学生にとっては、白紙の状態で来訪し、2週間で成果を出すことは困難であると考えられる。食事その他の生活面において不安を感じる場面が多くあった。実習期間より前に、各学生のテーマに即して受け入れ側が提供可能な事項について相談する時間を取ることも提案したい。

(6) 来年度に向けて

ここまで前述したことと重なるが、整理する形で以下に示したい。

まず、プログラムの全体像としては、引き続き今治市の様々な顔をみてもらうことへのフォーカスとする。その上で、期間中の学生フォローのために細やかな環境づくりや体制の改善、学びのフィードバック体制の時間と場を一層整えていきたいと考える。

また、参加学生が主体性を持って意見交換に取り組める仕掛けや、多様な声を聞ける場の工夫を凝らすことも検討していきたい。

最終的な実習成果のまとめの在り方についても、学生自身が自らの研究の方針やライフキャリアを見出していくという地域実習Ⅱの目的に立ち、発表形式・内容・方法等を含め、改善を加えていきたいと考える。



図-5 しまなみ海道体験

(2024年10月 関清剛撮影)



図-6 今治市への報告会

(2024年10月 関清剛撮影)

(7) まとめ

地域実習の受入れを開始し2年が経過したが、果たして学生たちにとって今治市での学びが本当に意義のあるものになっているか、検討する余地は多分にあると考えている。学生たちにとって実りある探求の場となるよう今後も現地講師と自治体職員が一緒になり、より良い体験が得られるようプログラムをブラッシュアップしながら、提供し続けたいと考えている。

一方で、本プログラムを通して、今治市を知り、興味・関心を持ってくれた学生、今治市が好きに

なったと言ってくれる学生たちが、「IMABARIST（今治ファン）」となり一人でも増えてくれることは、今治市にとっての最大のプレゼントといえよう。

4. おわりに

本稿は、大正大学地域創生学部地域創生学科で行われている「地域実習」についてまとめ、地域実習Ⅱの実習地となっている今治市で行っている実習について現地の視点から取り組みの工夫や課題などを含め報告した。

地域実習Ⅱは、学生がはじめて地域に長期に滞在する実習の形式となっている。2年生であることもあり、それぞれの学生のテーマが固まり切っていない中で、様々な情報提供をするための工夫が現場でおこなっていることがわかる。また、それぞれの課題や対策などもまとめられているが、一部は、地域創生学科とのより一層の協力をするにより解決ができるだろう。

最後に、学科の課題の一つとして、このような魅力的な実習を多くの方に伝えきれていないことがあるだろう。どのように広報活動を行っていくか今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 米崎克彦： 地域創生学部の新たな取り組み ―ウィズ・コロナ時代の地域創生―、大正大学地域構想研究所 研究レポート，2022a. https://chikouken.org/report/report_cat02/13311/
- 2) 米崎克彦： 新たな地域実習への挑戦、大正大学地域構想研究所 研究レポート，2022b. https://chikouken.org/report/report_cat02/14029/